

性障害陰影と合わせて偽像形成の可能性もあり診断時の注意が必要と考えられた。

臨床例において、骨シンチグラフィー、⁶⁷Ga腫瘍シンチグラフィー、副腎シンチグラフィーなどで特に有用であった。骨シンチグラフィーでは骨と肋骨、膀胱と仙骨などとの重なりの分離、⁶⁷Gaシンチグラフィーでは特に腹部の腸管との重なりの分離に優れ、副腎シンチグラフィーでは、投与3日後で鮮明な像が得られた。今後、out putの電算機との接続により、横断像の作成も可能であり、本邦でも普及する装置と考えられる。

42. β -TG リアパックの使用経験

石原 明 中崎 利彦
(天理よろづ・RI)
高橋 豊
(同・血液)
浜田 哲
(同・内分泌)

β -Thromboglobulin (β -TG) は、血小板 α 顆粒中に含まれる血小板に特異的な蛋白であり、血小板の放出反応に際して放出される。今回 β -TG RIA kit を入手することができたので、基礎的検討および、各種疾患における β -TG の検討を行なったので報告する。

検体は、静脈血 2.5 ml を駆血帯なしで手早く採血し、EDTA、ラオフィリン溶液を加えたプラスチック試験管内で転倒混和し、直ちに氷水中におき、2~4°C、2,000 g、30分間遠心後、上清 500 μ l を分離し冷凍する。 μ -TG 値は、駆血帯をして採血した時と、抗凝固剤と混和後、室温に放置した場合、軽度に上昇した。また、静脈穿刺に失敗し、2回穿刺した場合には、測定値は著しく上昇した。3種類の検体を用いた同時再現性、異なる kit を用いて測定した日差再現性の変動係数は、それぞれ平均 6.27%、6.52% であった。希釈試験では、230~6.5 ng/ml まで良い直線性を示し、回収試験でも平均 97.7% の回収率が得られ、精度の高い検

査法と思われる。血小板数との比較では、血小板数が少なければ低値を、多ければ高値を示した。血小板動態との相関は悪く、明らかに血小板破壊亢進が見られ血小板寿命が短縮している ITP でも、 β -TG 値は低値であった。

正常人の β -TG 値は、 19.1 ± 9.0 ($\bar{x} \pm S.D.$) で、その他の少数症例では、ITP はやや低値を、AIHA、IDA、直性多血症ではやや高値を示し、肝硬変、バンチ症候群、他の脾腫では、正常であった。

43. β -Thromboglobulin radioimmunoassay の基礎的および臨床的検討

末廣 謙 堀下 栄三
永井 清保
(兵庫医大・2内)
福地 稔
(同・RI)

生体内における血小板機能検査の一方法として、血小板から血漿に放出される β -Thromboglobulin (以下 β -TG と略す) を RIA 法で測定する方法が確立されている。今回われわれは β -TG リアパックにつき基礎的および臨床的検討を行なったので、その成績を報告する。

本キットの標準曲線は Assay ごとの再現性が良好であり、各点における変動係数は 5.2% 以下であった。さらに、血漿試料に既知量の β -TG を添加したさいの回収率は、平均 $97.1 \pm 9.3\%$ と良好であった。また、 β -TG 高濃度血漿の希釈曲線と標準曲線は、よく平行性を示した。同一 Assay 内における再現性は、平均変動係数が 5.9%，異なった 5 回の Assay 間における再現性では、平均変動係数が 6% であり良好な再現性を示した。

β -TG 値は採血方法により影響をうける。そこで健常人の採血時における駆血帯使用の有無による影響を検討したが、両者に有意な差異はみられなかった。

さらに本キットによる健康人および各種疾患の血中 β -TG 値の測定を行なった。健常人では平均